演劇脚本上卷

兒雷也豪傑譚語

夢結蝶鳥追

青砥稿花紅彩畫

合一册

版權所有
興行權

兒雷也豪傑譚語

二幕目

一　妖婦越路

一　田舍娘小草

No 13349

東京　妙者山術讓の塲
TOKYO　屠蘇亭行
TOSO　仙桑道人

本舞臺三間の間中足の二重奇麗成る藁葺家根栗丸太の柱向ふ鼠壁三方伊豫簾上下左右紫縮櫻の立木日覆より同じく釣り枝舞臺前山吹を結廻し四ッ目垣いつもの所枝折戸此道具調へ有りて宜しく納る

ト時の鐘鼓へ両吟の唄に成る　唄「世にすねし深山櫻のひとしほに作らぬ姿うつくしき今を盛りの一重咲トこだまの入りし合方に成り三方の伊豫簾を卷上ると内に女さらげ嶋田好の拵へ破にひぢをかけ本をよみ居る傍に小草田舎染の娘にて草苅籠より柴を出し揃へ居る女思入あつて(越路)遠近のたつきもしらぬ山中に四ッの時さへ白妙の雪の消るを春と思ひ木〳〵の紅葉に秋を知る浮世放れし山住みに谷のこだまの其外い誰か我名を呼子鳥おぼつかなくも鹿の音やましらの聲を友となし憂を忘るゝ身の樂しみァゝ住めば何國も都といハァ能ふいふたものじやなァ(小草)申姉さま今なつたい麓の入桐居爐裏へ麁朶をくべませふか(越)ヲゝかしこいよふ氣がついたもふ日のくれるに間も有まい居爐裏へくわんそを掛てたも(小)アィ〳〵(越)ドレよみさしへ枝折して夕けの仕度仕舞せうか「八重九重の都にも増る山路の花の色あかぬ詠めにわけ入りてト向ふゟ弘行袴大小好みの拵へ跳への編笠を持出て來る櫻の花ちら〳〵と散る「行衛何國と遠山鳥の尾上も霞む花吹雪ト弘行散る花を見乍ら花道能所へ留り(弘行)雪ならばいく度袖をはらふまじと詠せし歌も思ひいづ越の深山の花吹雪實に雪の日も斯やらんハァ一しほの詠めじやなァ○ト本舞臺を見て(花に浮れて思はぬも迷ひ入たる妙香山人家稀なる山中に尙珍らしきあづま家い浮世をさけし隱者なるか何にもせよ麓へ下らば余程の道幸ひ今宵の宿りを頼まんそふじや〳〵○「拂ふ袂の袖笠に櫟の戸ぼそへイみぬト弘行本舞臺へ來り枝折戸の傍へ寄り(アィヤ此家の内へあん内申(越)コレ小草おもてへたれやらムんした見ておじや(小)アィ〳〵○ト枝折戸の傍へ來てとなたでムんそへ(弘)春の日長のつれ〳〵に櫻狩してうか〳〵と歸る家路を忘れしもの一夜の宿をお頼み申ト小草女に向ひ(小)姉さん聞しやんしたかへ(越)ヲゝ聞ました〳〵○いづれのれ方か知らねども夫い嘸かし御難義ならん併し山家の事なれば夜るのものゝ御不自由をおいとひなくばお宿をおかし申ませふ(弘)ろれい早速忝ひ○何が扨宿りをお貸下さらばそのふのはしでも苦しふムらぬ(越)それ御承知ならサァ〳〵これへ(弘)然らば御免下されい○「頼む小影の花の香に浮れ心のときめきてト弘行内へは入り女を見てうつとりと思入思はず(テモうつくしひ(越)ェ(弘)ィヤ山櫻じやナァ「迷ひし道にまた迷ふ思ひの色ぞ繰のはしト三人とも二重に宜しく住ひ(越)コレ小草しぶくともお茶一ッ(小)アィ〳〵(弘)アィヤ必らずお搆まひ下さるな○ヤレ〳〵嬉しや舍りをかして下さらぞば木の根を枕と思ひしにかゝる情に預りて誠にあんど致して厶る(越)しかしお宿を申ても人里遠き山家なればおもてなしさへ心にまかせぬ(弘)アィヤ〳〵珍膳厚味の馳走よりはるかに增る此團條(女)とい云へ何ンそおもてなしに○ヲゝまだ日のくれるに間もあれば山家のつれ〳〵おなぐさ

みに○コレ小草つね〳〵そなたが唄ふ唄節びたふしもおなぐさみ唄ふておきかせ申しやいの(小)アイ〳〵(弘)ろれゝ何より一興ならん(越)ろれ迚もの事に踊りもとも〳〵(小)アイ〳〵ろんなら踊り乍うたいませふ(弘)サア〳〵所望じや〳〵(小)アイ〳〵と小草紅染の手拭を持宜しく前へ出る「村で一番圧屋どんの娘花の姿に若イ衆達が手折りたがるで袖襟引て太鼓鳴子で張番がついた引ば太鼓と鳴子の音がどん〳〵がら〳〵どんがらがら〳〵どんがらが太鼓の音もよしやットショ鳴子の音もよしやットショ引や〳〵袖や裾「わけもなやト小草宜しく振り有て納る(弘)イヨ〳〵面白い事であつた(越)イエモウおはづかしふ存まする(弘)イヤ〳〵年端も行ぬになか〳〵かんしんな事で厶る(小)有難ふ存まそる(越)サア〳〵もふ日の暮るに間も有まいそなたい早ふ内へ戻りや(小)アイ〳〵(弘)ムウスリャそれなる小女ゝ外〳〵ふ(越)ハイ此山の麓より毎日遊びよ参りまそる(弘)ハテ子供の足で余程の道を(越)なんの田舎に育ちますれば歩あるさで厶りまそ(小)そんなら姉さんまたわした参りませう(越)ヲヽ怪我せぬ樣に早ふ行ませ(小)アイ〳〵「あさる小鳥も塒時ふもとをさして急ぎ行くトかそめて山おろしと冠せ小草向ふへ走りは入る兩人思入あつて(弘)扨計らずも道に迷ひかゝる佳境に舍りをなそゝ彼もろこしの經浮山に淡粧素服の美女に出合これ趙師雄が故事も斯やと思ふ計り思ひきや(越)それゝ梅枝の許にして覺れば跡なき羅浮の夢これゝ櫻の花ゆゑにいぶせき賤の羽生の小家へみやびしお方をお留申も(弘)一樹の影の花の宿(越)一河の流れも遇遇の縁(弘)打くつろいで(兩人)斷しませうか「いつしか心ろ置しもとけて流れの水ぬるむト兩人思入女籠あんどうへあかしを附る脆への合方に成り(弘)まづ聞度ゝあるとの身の上かゝる深山に只一人浮世をのがれて居らるゝいかなる譯かゆへよしを苦しからずゞものがたられよ(越)其お尋ねにほだされてお咄し申も泪の種思ひ出せば五とせ先父母ともにみまかりて力とそべき人もなく此深山路に住居して心細くも朝夕の烟りの代に糸車くりなれし身のくり言も云ふもかいなくいつしかに髪のかざりも乱れしまゝくもる鏡に我影のうつるを親とかたらふて仇に年月送る身を不便と思ふて下さりませ(弘)いかなる人の果なるか聞もあわれな物がたりさこそと心さつしやられ思はず袖を濡してムる(女)よしない事をお斷し申山路のうさゝはらさいでかへつてあはれを添まして麁相な事を致しました○サア〳〵晝のおつかれ休め早ふおやすみ被成ませ(弘)アイヤしばらく(越)御用でムりまそるか(弘)サア今の咄しを聞に附ケ我身の上も聞て下され○何をかつゝまんそれがしゝ隣國信濃の更科家に仕官致そものなるが所用を兼て遊歴に櫻狩して思はぎも此山中へ分のぼり道に迷ひくれよ及び一夜の舍りを頼みし折りふつとそもじのようぼうに心迷ふて便もあらばと思ふ折から今の咄し聞にいやまそ我思ひ越の白根の胸の雲はらしてたもる心あらば國へともない宿の妻色よき返事を聞して下され「花の舍りの下ぶしに戀の情のあるならば濡あんものと寄り添ふて乱れかゝりし仇名草ト弘行女により添

ふ女思入あつて(女)いやしひ此の身をそのやうに腔にもいふて下さりまをゝ冥加ない事ぢがちわたしがあなたへお返事ゝ「あだし心とうちつけにいはぬいふに櫻花の卜女斬口の櫻の枝を折り弘行の前へ出し(コレ御らうじて下さりませ深山櫻ゝ深山にて見れば)ふせいもあるようなれど都へうつさば色香も薄くいかで詠めになりませう(弘)イヽヤ都の花にも増りし深山木是非とも手活に所望したい(越)スリヤ花守りのなき身ゆゑ(弘)望みかゝりし上からゝ(越)ゆるしなくとも(弘)手折て手活に(越)イヽエわたしゝ(弘)是非共身共が○ト女件ッの櫻の枝と舞臺へ打附る仕かけにてはつと飛散る弘行思入あつて(弘)ムヽ落花再び繁らぬ必か(女)アイナア「色香見捨て立つかう金の(弘)スリヤかはどに申のも(越)わたしが身でゝ(弘)ヤ(越)花にあらしでムんそわいナア「つれなく歸る越路潟ト女褄を拂ひ能所へ住ひ能行燈を引寄せ以前の本を讀み居る弘行むつとせし思入にて(弘)ハテ必憎き女が振舞いつたん思ひそめしからゝ此場に於て我戀を叶へればよしさもなくば武士の一ぶん言ねばあらぬいやかおうかゝ生死の堺性根をそへて返事をしやれ○ト女そしらぬふりにて本をよみ居るゆへ(ムヽ有無の返事をなさゝる上ゝもうこれ迄○覺後いたせ○ト弘行刀を拔てふり上る女これを見向もせず手筥より小筒の鉄炮と出し筒先を弘行へ向けやはり本を見て居る弘行これにて恟りなし切ふとしても切られぬ思入トヤそきを伺ひ切かゝる女小筒にてあしらい一寸立廻り入替て刀を打落し其まゝ刀を二ッに折て捨る弘行ぎよつとなし(ヤア怪しき女が不敵のふるまひィテ此上ゝと差添を拔ふとそるドロ〳〵に成り弘行拔ぬ思入立ふとしても五体そくんで動かれぬこなしにて無念の思入女これを見てにつこりと思入(女)いか程武勇はげしくもわれに對して無益なりそも〳〵大事をかゝへし身にて女に心と動かそ事これ大丈夫の魂ならぎ今より心ひるがへし我を尊敬禮拜せばゆるし得させんいかにぞやトさつといふ始終ドロ〳〵弘行恟りなし(弘)ハヽッ我両眼ゝあり乍かゝるふしぎの君とも知らずたはむれしこそおろかなれたゝちに心ひるがへさんゆるし玉へゆるさせ玉へ(女)我御身を待事年久しけふ討らぎも對面なして勇氣をためそも語らるべき子細ありての事ぞかし今改めて對面なさんト大ドロ〳〵に成り弘行ゝ刀を杖にもんぜつそる女ゝ後ロの壁へ田業にて消るこれと一時に知らせに附家体の攔間を引上げ杉の釣技と替り柱ゝ杉の立木と成る後ろの襖蹴込とも岩組に替り能所へ大なるがま形りの岩を押出そ留の木にて床の淨るりに成る上るり「怪力乱神ゝ語らぎといへと怪異ふしぎのなきにもあらぎ妖广の所意か目前に賤が伏屋も雲霧と消て跡なき妙香山稍にあらき小夜嵐ぞつと身にしみこゝろ附トかそめて風の音弘行心附あたりを見て(弘)ヤヽ今迄ありし賤家と共に妖婦の影もなく木立そるぎき是深山ハテ必得ぬ「あたり見廻す後ろの方ト弘行あたりへ思入がま岩の内にて(道人)尾形弘行〳〵「呼はる聲に(弘)ヤヽ聲あつて形なく我本名を呼たるはムゥ○「合点行かぎと伺ふ折から又もや山谷鳴動なしかたへの岩石二つに割れ顯れ出し異形の道人弘行きつと

打見やりト床の合方大どろ〳〵にてがま岩二ッに割れ内に道人白髪の異人好の拵へにて出る弘行これを見て（頭ハおどろの白髪に凡眼ならぬ異形の老人そもまづ御身ハ何人なるや「問ふに異人ハ打うなづき（道）ホヽヲ我こそハ此山に數百年の星霜を經て霞をのみ丹をねる事久しされば霧を起し雨を呼び雲に乘じて宇宙の間を飛行なる事自由自在まつた平地を險阻となしわづかな池も大海となるがまの妖術を行ふ仙素道人といふものなり「聞に弘行かうべをさげ（弘）ムヴ凡人ならぬと思ひしに仙素道人にてありけるか○扨ハ今の賤の女ハ（道）なんじが武術をためさんとわが妖術にてなる所（弘）シテ何ゆゑに某を此所へハ招かれしぞ（道）ホヽヲ不審なる尤今其方兒雷也と異名を呼んで盗賊なし軍用金をあつむれ共非義非道を働かぜ富たるものゝ金銀を奪ひ貧しきものゝ施を心底かんずるに餘り有り大望成就の助ケにと我妖術を傳へん爲又二ッにハなんじが父たる尾形弘澄無念の最期をとげたるあらまし告ゲ知らさんと招きしぞ（弘）スリヤ此場にてがまの妖術父が最期のあらましを（道）語り聞せん承れ○「語り聞んと座をかまへ（汝が父たる尾形の左衛門弘澄ハはるかに遠き筑紫かた釜城の郡の城主にして四海に心をかけたれ共事あらぜして半途に落命○ィデ其頃ハ應永五年末の秋の事なりしがむほんの氣ざしあらはれて○「鎌倉管領の嚴命を受ケ其頃都在番たる月影照時更科稚光討手と蒙り筑紫に向ひ合戰數度に及びし所（ひさんや尾形ハ兵粮尽きかつに及ぶ其庵を計り○「稻麻竹葦と押し寄るさしもの尾形も敵しがたく鬼神のあれたる勢ひに近づく敵もなかりしが（運のつき弓矢一ッ來りむざんなるかな弘澄がまつかうべにはつしと立○「痛手にたまらぜよろめきながら廣椽先に突立上りヤア〳〵敵方来れ九州四國ゑ猛威をふるひ去ル者ありと呼れたる（尾形の左衛門弘澄が最期の程を見物なせと○「大音上に呼はつて太刀取り直し我とわが左りの腹へがばと突立血ばしる眼に齒がみをなし遂にむなしく成り果たり（其時汝ハ三才にて畑作が懐に抱かれ虎口とのがれ民家に下り人となつたる年月をかぞへて見れバ早廿とせ昔しがたりと成つたるか思へば夢の世の中じやなァ「今見る如きもの語りに兒雷也思はぜこぶしをにぎり（弘）廿とせ先を目前に見るにも増るお物語り聞に附ても亡キ父が當の敵ハ更科月影見ゑ〳〵今に嶽上なし兩家をはヒめ鎌倉管領打亡　て尊靈の修羅の御無念晴させ申さん思へば無ねん口ふしやナァ一血ばしる眼に無念のぎやうろう異人ハはたと小膝をうち（道）ホヽヲいさまし〳〵去り乍汝わづかの衆賊を味方となしての大望ハ事成就またるし〳〵今我妖術を讓りあたへん是を行ひ助ケにせよ（弘）スリヤ妖術をお讓り下されんとな（道）いふにや及ぶ○その身を清め會得せよ（弘）ハヽッ「異人ハかたへの岩角をこぶしをもつてうと打割り清めの切火掛ケ〳〵秘密の九字をこくうへ切りト此内道人かたへの岩角と打割弘行の骸へ切り火を打掛ケ九字を切る弘行も九字を切て（道）南無さつたるまぶんだりぎや（弘）南無さつたるまぶんだりぎや（道）守護聖天（弘）しもぐせうでん（道）はらいろ〳〵（弘）はらいそ〳〵「傳ふる術のさとく

にてうんと計りにもんぜつなせバト弘行ウンともんぜつをる(道)をとくなせしかこりや弘行「呼はる聲にこゝろ附キ(弘)ハッ性にをとくいたして厶る(道)秘文をとなへ心見よ(弘)ハッ○「以前の岩を取りあげてト切り火を打ち岩を取り能所へ置て（南無さつたるまゞんだりぎや守護聖天はらいそ〳〵○「秘文をとなへ印を結べばふしぎや岩ハがまとへんと飛かふさまに横手を打トぞろ〳〵に成り仕掛にて件ノの岩蛙と成り飛歩く（ハッかゝる妖術受つぐ上ハ龍につバさを得たる心地アラ嬉しやよろこばしやなァ「悦び勇めば道人重ねて(道)此妖術を行ふ上ハ岐首蛇ととなふる双頭の毒蛇の血汐を服をる時ハ忽術の破れとなる恐るべし〳〵(弘)スリヤ岐首蛇の血汐を服をる時ハ行ふ術の破れとな(道)いかにも神變ふしぎの妖術も元かまのなをわざゆをれろちにハ歇し難く此程黒姫山より年經しおろち爰に來りて夜な〳〵丑滿すぐる比この谷間より出來り我をなやまを事しば〳〵なりこれを討んな術に及ばず人力ならで退治し難し汝順弟の因を思ハゞおろちを討て我がうれひを晴さし呉よ(弘)ハッ仰せにや及ぶべきたとへ年經るおろちにせよ飛道具にて討取んな此弘行が手裏にあり(道)ホヽヲ恩義を忘れぬ汝が誠心今より影身に附添ふて猶行末を守るべし(弘)スリヤ影身にそふて大望の助けとなつて下されんとなチエヽ添ひ(道)猶も秘文を記せし一卷これと汝に讓りあたへん「怪しの一卷取出し渡せば弘行押頂き（弘）スリヤ此一卷を某に(道)此場に置てひけんせよ(弘)ハッ○「経とく〳〵と押開き（ヤテ此じゆ文ハ(道)天地も忽ちくつがへを自由自在の秘密のじゆもん(弘)スリヤアノこれが「一卷得と打詠め秘密のじゆもん一〳〵に問ば答ふる山ひこの谷間へ傳ふ口授口傳ト此内弘行一卷をひらき見てこなし道人これをおしへる思入よろしくあつて(道)會得なせしか(弘)ハヽ(道)あとく致さば試みよ(弘)ハッ○「又もかたへの岩角打かきト岩角をかき（なむたいにうませんだるぎやしよじんけんらいはらいろ〳〵○「さづかるじゆもんとなふれば忽ちあやしの鳥とへんじこくうはるかに飛行し妖广の術をふしぎなりトじゆ文を唱ふるぞろ〳〵に成り件ノの岩あやしき鳥に替り飛行これを見て（ヤヽ心のまゝに飛行なせしか(道)ろれど傳ふる秘密の妖術ト(弘行)一卷を開き見て(弘)今ぞとゞきし我が念願両家を亡を時節至來アラ嬉しや○弘行膝をつくと木のかしら（悦ばしやなアト大ぞろ〳〵カケリにて

夢結蝶鳥追

序幕　東橋見初の場

一　せつた直し長五郎
一　人相見梶井主膳
一　鳶の者下駄の市
一　女太夫おとら
一　山崎屋與五郎
一　三原傳藏
一　山崎屋手代權九郎
一　判人佐渡七
一　中間べく介
一　同　角内
一　阿古木源之丞
一　女太夫かこよ
一　ふじやあづま
一　松ヶ枝屋女房おかく
一　山崎屋でつち三太

本舞臺下の方よしづ張の出茶屋田中屋と云掛行燈能所に臺をそへ爰に吹かへのせつた直し古き笠を冠り仕事を仕て居る出茶屋の床几に町人の仕出し三人腰とかけひやかしの仕出し二人下駄の鼻緒を直させ立懸り都て東橋の体鳥追唄通り神樂にて幕明く

ト仕出し皆〳〵橋懸りへはいる向ふあづま仲の町の藝者他所行の形りおかく茶屋女房の形り若ィ衆の男附出て來り舞臺へ來て（かく）モシあづまさん與五郎さんがいいしやんした東橋の田中屋ハ爰でムんそ（あづま）そうでムんそかぬしい見へなさんしたか聞て下さんせ（かく）アイ〳〵〇モシこちらへ八幡丁の山崎屋の與五郎さまがお出の筈でムんそがまだお出なさんせぬかいナト茶店より若ィ衆の茶屋男出て（茶屋男）イエまだお出被成ませぬがモウ押付お出でムりませうまアおかけなそつてお待なされませ（あづ）アイ〳〵ト腰入床几へ掛るト右鳴物にて橋の上より與五郎羽織着流し子役のでつち風呂敷包を背負出て來りあづまを見て（與五郎）そこに居やるハあづまでハないか（あづ）お前ハ與五郎さんよム來て下さんしたなア（かく）ほんに若旦那さつきからお待申ました（與）松が枝屋のおかくさんけふハ御苦勞でムりまそコレ三太やわしハ觀音さまへ御參り申て歸るから先へ歸つてそういふたがよい（三太）ハイ〳〵ト子役上手へは入る與五郎床几へ掛る（あづ）モシ與五郎さんけふハ向島へ行程に早ふ來やといはしやんして今迄どこへいつてムんした大方余所の女中さんの所へいて居やしやんしたのであらうぞいナ（與）何のその樣な事があらうけふハお出入の千

業のお屋敷へ出ておそふ成たのじやわいの（あづ）はんにお屋敷といはしやんそりやお前も知つてムんを三原傳藏といふ侍客が身受するといふてうるそうてならぬわいナ（與）サアわしもそう思ふて居れどそなた衆も知つての通り元わしゝ千葉の家中南方十郎兵衛さまの悴にて山崎屋へ養子の身の上與次兵衛さまゝ世間の義理ゆゑわしに家督を讓り法体して表向ゝ隱居といふゝ名計りわしが落度を見付て追出し妹のおてるに持參の付髢をとらうといふ無慈悲な人ゆゑ今に身代を渡されねば金の出入ゝ自由あらずけふも千葉の御屋敷から下ゲ金の百両受取て持てゝ居れどわしが儘にゝ成らぬ身受の金の工面に當惑して居るわいの（あづ）どうぞよい工夫をして下さんせト向ふへた〳〵鳥追通神樂に成り向ふを主膳惣髪少し更たる拵へさんそいなる形り大小にて羽織着流し手代の權九郎を引立て出て來り（權九郎）モシ〳〵どうぞ御了簡なされて下さりませ〳〵（主膳）イヤ〳〵了簡ならぬ向ふへ參れ〳〵（與）コレそなたゝ權九郎でゝないか（權）ヲヽお前さまゝ若旦那能所にお出被成ましたヽ（與）見ればお侍に引立られコリヤ一体どふした譯じやぞいの（權）イヤモ近年にない不調法で此御浪人に不禮を致しまして斯の仕合でムりまそどうぞお詫を被成て下さりませ（與）そりやどの樣な事か知らねどわしが詫をして見やうわいの○申御浪人さま此者ゝ私が召連ひでムりまそ樣子ゝ何か存ませぬがあなたさまへ對し御無禮致ました迚御立腹の体何卒私に御めんと下されまして御了簡なされて下さりませ（主）スヲヤ何とおいやるお手前ゝ此者の主人じやとおいやるか（與）左樣でムりまそ（主）イヤモ惡ひ召連ひを持て氣のどく千万委細の譯を申聞そからとくと聞つしやい○身共ゝ梶井主膳といふもの見らるゝ通り浪人の世渡りに向ふの四ッ辻にて賣卜を致し居る所此者が通り懸り身の上を見てくれいと申故はんだん致し遣せし所身共のはんだんが相違致せしとてめどぎ天眼鏡ゝ元より恐れ多くも土御門より拜領なしたる易道免許の御書を土足にかけたる不屆さやつ浪人なせど帶刀致せば此儘よは差置れず此所に於て眞二ッに手討に致そ覺後極めて夫へ直れ（與）申御浪人さま委細の樣子承りまそれバ何とも申上樣もない不屆至極の惜ひやつでムりまそが何卒あなた樣のお慈悲を持まして御助け下されまそる樣偏へにお願ひ申上まそ（主）そこ許が夫程に詫致すそこねてゝ賣卜渡世が相成らぬ夫故京都表へ斯の次第を申上て此者の命乞と致し改て免許の御書を拜領致そにゝそれ〳〵心遣ひがなければならぬが其入用ゝ承知でムらうな（與）其義ゝ召使の不調法お詫致し舛からゝ私が身に叶ひまそ程ならば（主）イヤ何も格別の金子でゝないて（與）シテ其金子ゝ何程でムりまそ（主）其金高ゝ百兩じや（與）エそんなら金子ゝ百兩でムりまそか（主）夫得心なら勘辨の致しくれう（權）若旦那千葉さまから百兩受取てそこに持てお出なされまそか（與）爰にしつかり持ているはいの（權）左樣ならば其金子を暫らくの間私に御貸なされて下りませ（與）テモ大まい百兩の金（權）モシ若旦那私も大家の山崎屋

の御店を預る番頭の權九郎百兩や二百兩の金であなたに難義ゝかけませぬとふぞお貸なされて下さりませ(與)夫程にいやる事親父さまへゝ受取ぬといふて貸てやりませう(權)左樣なら御貸被成れて下さりまをかゝ、有難ふムりまを(與)貸ゝかそうが念の爲證あ一札を書てたも(權)畏りました暫くお待下さりませト權九郎矢立と出し證文を書く鳥追通り神樂に成り橋掛りより佐渡七羽織着流し股引にて出て與五郎と見て(佐渡七)ろこにお出被成まをゝ山崎屋の若旦那じやァムりませぬか(與)そなたゝ判人の佐渡七どこへ行きやるのじやゝ(佐)どこへじやァムりませぬお前さんにお目に掛らうと今朝からさがして歩行きましたよい所でれ目に懸りました○外の事じやァムりませぬあづまさんの身受の事此間からお前さまが身受する〳〵と計りおつしやつて手附もお渡し被成いませんが外から身受の相談がムりまをが親方もあなたの方が先口ゆゑ御あいさつを聞てこいと申ましたがどふなすつて下さいまを(與)成程そなたの云のゝ尤じやが金の都合に懸つて居れバ是非〳〵手附を渡します程にどうぞ二三日の内の所を(佐)どうして〳〵たとへわたしが待ても親方が得心しないからどうも仕方がないのサト此内權九郎證文を書判を押て與五郎のそばへ來て(權)若旦那證文を認めました○一金子百兩ゝ右ゝ我等無據命を買求めゝ金子に借用致ゝ處實正に御座ゝ返濟之義ゝ其許樣御入用次第早速返金申べくゝ爲念依而件如年号月日山崎屋與五郎殿借主山崎屋手代權九郎判○是て宜しふムり舛るかト與五郎取て(與)是でよいそうして此金ゝいつ迄に戻　やるぞいの(權)夫ゝ證文通り何時なりとも御入用次第(主)コリヤ〳〵與五郎とやらいつ迄身共を待せて證ふ得心ならァノ者を與二ッに致そふか(權)アもし只今金子をお渡申まをモシ若旦那早く金子をお貸被成まを(與)そんなら早ふもどしてたも(權)ハイ〳〵慥に借用致しました直にあふたから御浪人さまへ御上なされて下さりませ(與)主膳さま御約束の金子百兩何卒是で權九郎が命をお助け被成て下さりませ(主)承知致した百兩ゝ千葉の封金改めるに及ばぬ慥に受取申たハヲ命めうがな町人じやあァ(與)コレ〳〵佐渡七今聞通り權九郎に百兩の金を貸たゆゑどうぞこなたの顔であさつて迄親方の方をよい樣に取なしを頼むはいの(佐)そうおつしやるなら親方の方へ云のべて置ませう(主)コリヤ〳〵佐渡七とやら是へ來やれ(佐)ヘイ〳〵何が御用でムりまをか(主)最前から是で承つたが御身ゝ吉原の廓で奉公人のさもいり渡世致を男そうながあれに居る藝者あづまが身受ゝ身共が致すぞ(佐)ついぞ是迄れ馴染でもないあづまさんの身受をあなたさまが(主)ふしんに思ふも尤千万身受の客ゝ身共でゝない外にある(與)シテ又あづまが身受の客とおつしやるゝト此時上手より傳藏羽織着流し大小にて伺ひ居て(傳藏)身受の客ゝ身共でムるト台方に成り上の方へ出る皆〳〵思入(あづ)ェお前ゝ三原傳藏さん(傳)兼〳〵あづまに執心の傳藏身受致して婦妻に致を(與)ろんおら主膳さまが身受をるとおつしやつたゝ(主)いかにも三原氏とゝじゆこんの身共夫故身受の取持致をあづまが身の代ゝ貳百兩と聞手附の百兩只今相

・渡し跡金い一兩日の内サア敬めて受取りやれト以前の百兩を出を(佐)私いどちらでも御金の早い方が宜しふムりまするモシ與五郎さまお聞の通り只今右から左りに手附の百兩受取まをればおまへさまの方いお斷り申まを○モシ權九郎さん矢立をちよつと貸て下さいませ(權)コリヤ丁度い丶所で聞に合たト矢立を渡を佐渡七證文を書く(あづ)モシ與五郎さん傳藏さんの方へ身受されゝばわたしや生てい居ぬぞへ(與)ハテ今身受が濟だと云でもなしわしも今宵の中に手附を渡ー跡金の出來次第身受をる程にかなら心氣違ひせぬがよい(あづ)其樣におつしやれど御内の御首尾が自由にあらねばとふも心が濟ませぬわいナト此内佐渡七證文を書主膳の前へ出し(佐)主膳さま手附金百兩の受取をさし上ます御名宛い傳藏さまで宜しふムりませふなト主膳證文を取て(主)是でよしサア封金百兩受取りやれ(佐)ヘイ〳〵百兩金慥に受取ましてムりまをト佐渡七百兩を財布へ入て懐へ入る(傳)コレあづま跡金い渡さをとも手附の百兩濟たれば今日より傳藏が宿の妻も同前身共と一所にサア來やれ(あづ)イヱ〳〵わたしが敬いけふ一日與五郎さんの揚なればナア申おかくさん(かく)さいなアわたしが預つたあづまさんあなたの自由よい成ませぬわいナ(傳)ヱヽつべこべとやかましい何でも身共が連て行わへト又立かゝる(主)是いしたり三原氏身受の濟ぬ其内い我まゝ氣まゝも是非がムらぬ先手附の濟だ祝ひ酒小倉あんへでも行ふでいムらぬか(傳)いかにもどちらへでも參ろうが夫もあづまを同道せねバ(主)ハテ野暮い當時はやりませぬてト兩人はいるト橋の上よりべく介角内紺かんばん中間の形にて出て與五郎を見て(べく介)コレ角内見ろさつき向ふ河岸でおいら達につゝかつた二才野郎が爰に居る(角内)ほんにそうだろく〳〵にあいさつもせず逃てうしやアがつて見りやア女の傍にもた付てけつかる(兩人)性根を付てやらういへト兩人にて與五郎に打ッて懸る爰へ下駄の市蔦の者にて出て來り兩人をはり倒を(權)誰かと思つたら町抱への下駄の市(與)わしが難儀にあふ所へ(女兩人)ほんにようふ來て下さんしたナ(市)若旦那何か樣子い存ませんが私が來ましたからい落付て御出被成いませ(べく)ア丶いてへ〳〵うぬいどこの馬の骨か牛の骨か知らねへが(角)喧も聞をにおいら達を何でこゝへ(兩人)なげたのだ(市)ヲ丶なげてもい丶叩き殺しても大事ねへい(兩人)ろういやうぬから○ト兩人市へ打て懸る市立廻り兩人を追ちらを中間兩人逃てはいる(あづ)ほんにどうなる事かと思つたによい所へ市さんが來なさんして(かく)不難に濟でわたしらが悦び(佐)何といつても今日の出の八幡丁で指折の(權)町抱への下駄の市公さついものであつた(市)モシいくらおだて丶もこはだのそーもおごりませんよト與五郎此時紙入なきに必付(與)ヤ丶今迄懐に持て居た紙入が見へぬアノ紙入よい今權九郎から受取た百兩の證文まだ大切なあづまのきせうもは入て居れば(權)何とおつしやる今の涙人がお前さまの大切な紙入をエ丶憎いやつ待ちおれヤイどろ坊〳〵ト通り神樂にて權九郎追かけるふりにて橋の向ふへは入る(市)權九郎殿が追かけて行ましたれば取かへして來ませう万一

知れにやアこゝらいかせざての眞なれば其手筋から詮義それば知れあい事ゝムりません（あづ）市さんがアノ樣に云ッてなれば氣遣ひせもと一す一所よ（かく）最前から氣のもめる事計り御ひとつ上つた其上で（佐）またいゝ思案もムりませうちつとも早く與五郎さん（與）それじやといふてぞふもわしい（市）ハテきな〳〵思ゝす若旦那（みな〳〵）サァお出被成ませト皆〳〵向ふへは入る橋懸りゟ長五郎せつた直しの拵へにて出て來り臺の上にて仕事に懸る橋の上より源之丞大小侍の形りよて出て來り舞臺へ下りる此時ぞうりの鼻緒切れる（源之丞）ハテ折惡きぞうりの鼻緒○ト邊りを見廻し長五郎を見て（幸ひのはき物直し○コリヤ直しの者身がぞうりの鼻緒直してくりやれ（長五郎）ハイ長りました○ト又唄に成り長五郎臺の上にある麻裏のぞうりを出し取り源之丞にはかせ件ンのぞふりを取て見る是にて唄切るかもめた通り神樂に成り（コリヤまだおろし立のおぞうりどうして鼻緒が切れましたか○ト言ながら源之丞の形りをじろ〳〵見て（すてきにりつぱなお侍さまだ○（ハテナぞうかあなたい見たやうな○思ひ出したチゝそうだ見た筈だモシ殿さま憚りながらお前さまゝ阿古木の若殿さま源之丞さまじやアムりませぬか（源）ムゝ我名を知つたる其方ゝ（長）ヘイ御ふしんゝ御尤長五郎めでムりまもト笠手拭を取る四ッ竹もやうの合方長五郎五十日きたなきかつら源之丞よく〳〵見て思入（源）ヲゝ誠にそちゝ以前出入の長五郎思ひがけなき此出合（長）御殿さま（源）ハテ久〳〵で逢たよなア（長）まア〳〵あなたさまにも御機嫌宜

しくこんな目出度事ゝムりません（源）そちも堅固で重畳〳〵去必以前にかゝる賤しき姿（長）御聞なそつて下さいませ以前ゝ神田白壁町で人にも知られた左官の棟梁長右衛門が悴長五郎三度の飯より色と酒また其上になぐさみ好き意見も馬の耳に風打やら買やらちきさわぎ詮方つきて親父の勘當あつちの近付こつちの友達四月五月半年許りごろつきあるきの居候長い月日に短かい錢の三文きなかの働きも出來ねば他人の悲しさに末の別れゝわいろづかし身のたゝぎみも人の軒貰ッて暮を氣さんとゝ譬への通り三日して忘れられねへ世渡りにとう〳〵非人の中間入り人交りの成らねへも親仁のばちで此ざまと朝夕我身をくやんで居まも(源)聞ゞ聞はど不便な身の上どうぞ誠の心よ成り其身を清ふ仕たがよいぞや(長)有難ふムりまも○私が身の上ゞなしで思ゝもおはき物がおそなはりました暫くお待なされませト長五郎鼻緒を直しにかゝる源之丞紙入より小判を一枚出し紙に包み(源)長五郎取ておきやれト出も長五郎取て(長)ヘイ○コリヤお金モシ殿さま有難ふムりますト長五郎思入あつて腹がけの隱しへ入れる鳥追唄通り神樂に成り向ふよりおこよ鳴田かつら着流しあみ笠を冠りおとら鳴田くづしかつら着流しあみ笠三味線を二てう合せて手拭を卷抱へ出て來り舞臺へ來て長五郎を見て（こよ）モシ長五郎さん此間ゝさつぱりお目に懸りませんねヘト長五郎おこよを見て（長）ヲヤ誰だと思つたらおこよさん今お歸りでムりまもう大きに御無沙汰を致しましたぞうぞ頭によくいつておくんなさいませおこよさんいつもながらき

れいたよ(とら)長さんのお様で世事のいゝ事其口前でいくたり女が殺されたか知れないよ
(長)おかたとけよコウおとらはくちがわらア一ぷく呑でいきねへな(こよ)長五郎さんちつ
と遊びにお出なさんせ(とら)ばんに長さん今日いおこよさんの誕生で赤のおまんまが出來
たからばんにお出な(長)そいつア有難てへ御馳走に成りよ行やせう(とら)長さん急度お出
だまをとさかないよト右鳴物兩人橋を渡りながらおとら源之丞を見ておこよへ咀くおこよ
ふり歸り〳〵源之丞を見ながら橋の向へは入る源之丞しゃうおこよに見とれ居て扇を開き
かざして跡を見送る本釣鐘しつとりとしたる合方此内長五郎どうりを直し源之丞の前へ出
し(長)へイ殿さまおぞうりが出來升たトいへども耳に入らぬ向ふを見ながら(源)梅が香や
乞喰の家ものぞかゝる(長)大きにお待遠でムりました(源)晋子が秀句も目の當りハテあ
てやかなト見とれる思入長五郎心附す(長)おはき物が出來ました○トいへども返事とせね
ゆゑ思入あつて(モヽ殿さまト大きくいム源之丞悔り持たる扇を落そを木のかしら(源)世
話であつたトどうりをはきながらやはり向ふを見送る長五郎落たる扇を取てたゝんで出そ
これをきざみ家根舟の佃ぶし薄き涙の音にてよろしく　ひやうし幕

序幕

一　雪下濱松の場
　　稻邑ヶ崎勢揃の場
一　玉鳴逸當　實ハ日本左右衛門
一　早瀬の娘おなみ　實ハ弁天小僧菊之助
一　早瀬の若徒四十八　實ハ南郷力丸
一　忠信利平
一　赤星十三郎
一　濱松屋番頭與九郎
一　同　手代太助
一　同　佐兵衛
一　寫の者三吉
一　濱松屋若ィ者與介
一　同　小僧　三人
一　玉鳴の若徒作平
一　同　中間權内
一　幸兵衛悴宗之助
一　濱松屋幸兵衛

本舞臺都て雪の下濱松屋呉服店の体爰に奥九郎番頭の拵へ佐兵衛左助手代にて住居

鳶の者腰をかけ小僧三人立掛り居る此見得角兵衛獅子にて幕明く

ト此内右の鳴物にて向ふより△若流し尻はしよりにて出て來り直に門へは入る(△)ハイ御めんなせへ(佐兵衛)これいいちつしやりませ(△)トキニ番しうどうしてくれるのだ此間誂へた五枚の小袖まだ染が出來ねへのかへ(佐)イエモウ染いあがりましたがお仕立がまだ出來ませぬ(△)まだ出來ませぬじやァ濟めへじやァねへかけふでいつか來ると思ふ(佐)ツイお天氣合の惡ひのにゆうぜん入りの摸樣ゆへ急に染があがりませぬので大きに遲なわりまして厶りまそ○左助どん夕方迄にい出來る積りだの(左助)左樣で厶りまそる先程仕立やが參りまして五ッ過きにい持て參るといひました(△)ろれじやァ晩ンに取に來よふ(與九郎)さやう被成て下さりませト右の鳴物にて下手へは入る(鳶の者)モシ佐兵衛さん今の若へ者いなんだね(佐)なんだか知らぬが祭りに着るとて涙手な着物を誂へました(左)今時分の祭りでいどこの祭りであろう(鳶)拵へから物云い遊び人に違へねへなんだかきよろ〳〵見廻して目附のわりい野郎だ○ドレ奥へいつて鉄くせへのでもやつて來やうかトやはり右の鳴物にて鳶の者奥へい入るやはり此鳴物にて向ふより逸當そうたと羽織袴大小立役の拵へ作平指羽織袴股立大小若徒の拵へ源五紺看板一ぽんざし中間にて附添ひ出て來り花道にて(逸當)コリヤ作平濱松屋と申い向ふの店じやな(作平)左樣に厶りまそ近年の仕出しに厶りますが殊の外繁昌致しまそる(逸)いかさま左樣相見ゆるト舞臺へ來り(作)頼もふ(與)ハアこれへ〳〵○ト飛んで出まづ〳〵是へお通り遊ばしませ(逸)ゆるしやれとト刀を提ゲ上手へ通る(佐)コリヤ菊どんよ〳〵小僧ハアト(小僧)茶をくみ逸へ出そ(與)今日いよふ快晴致しまして厶りまそる(逸)さればうらゝかな事で厶るト逸當袖烟草入を出し烟草と呑み居る(作平源)下手に扣へ茶を呑居る(與)御注文の品い何品で厶りまそな(逸)北條家への進物じやが七彌綿緞子のたぐひ織物を見せてくりやれ(與)畏りまして厶りまする○コレ太助どん奥藏へいつて持て來され(太)畏りましたト太助奥へは入るト合方にて奥ゟ幸兵衛羽織着流し亭主の拵へ太助卷物を持出て幸兵衛下手に手をつかへ(幸兵衛)是ハ〳〵よふいらせられまして厶りまそ(逸)ヲヽ○シテろの方い(幸)此家のあるじ幸兵衛めに厶りまそる(逸)さやうでゐつたか(幸)毎度御ひいきと厶りまして御用向を仰聞られ有難ひ仕合に厶りまそる新見せの義で厶りまそれば何分お引立をお願ひ申上まそる(逸)手前屋敷抔でも評判ゆへこれ迄の出入もあれど北條家への進物に珍らしき所もあらうかと其方店へ參つたのじや(幸)珍らしひ品と仰られまそれば御意に入る品いあるまい○幸ひ京都より誂へました新荷が着イておりまそれば御覽に入れませう(逸)誂へ織とあるからい定めて高料な品であらうが價へい何程でも苦しふない珍らしひのが所望なるぞ(幸)畏りまして厶りまする○コリヤ〳〵太助きのふ着ィた新荷をはどき錦類を持て來やれ(左)畏りましたト奥へは入る(幸)然し少

〳〵手間取りまそれば爰ハ端近奥の間で暫くお待下さりませ(逸)いかさま込合中にふるも邪广然らバその方が詞にまかせ奥で相待申であらう(幸)さやうなされ下さりませ(逸)然らば御ていしゆ(幸)からお出被成ませト幸兵衛先に逸雷附添ひ奥へは入ると向ふより早瀬娘嶋田振袖の袴へ四十八羽織袴つまみ股立大小侍の拵へにて附添ひ出て舞臺へ來り門ト口にて(四十八)サアおせうさまおは入り被成ませ(浪)そなた先へは入りやいの(四)左樣なら御めん被成ませト内へは入る此時太助も奥より出て (これハいらつしやりませ(佐)サヽ是へ〳〵(奥)まづ〳〵是へ(皆〻)お通り被成ませ(四)サアおせうさまお上り被成ませ(浪)上ツても大事ないかや(四)よろしふムりまそ共○コレはき物を頼ひぞ(三保松)畏りましたト四十八娘能所へ住ふ(奥)扨今日ハ能お天氣でムりまそ○コリヤ茶ばんよ〳〵(小僧)ハア……ト茶をくみ持て來て四十八娘に出そ佐兵衛太助よい娘だといふ思入にてお涙に見とれ居る(奥)シテ何を御覽に入ませうな(四)京染のおふり袖に毛織錦の帶地の類又おじゆばんに被成る緞ちりめん緋鹿の子などを見せて下さい(奥)畏りまして ムりまそ○コリヤ三保松よ京染のもやう物毛織にしきの卷物に緋ぢりめんひがのこを持て來い(三)ハア……ト三保松奥へは入る(奥)只今御覽に入れまそるト此内三保松紙附の摸樣物卷物の帶地につゞらへいれし緋がのこ緋ぢりめんのきれ地を持て來る(奥)大きにお待せ申ました○トいひ乍品物をならべるらゝコレ小僧よわかりを持て來ぬか(小僧両人)ハアヽトこれにて朝顔附の燭臺をならべる

(娘)コレ四十八鹿の子ハどちらがよかろうぞいの(四)もやうものヽハ婚禮ゆへ目出たい物がよろしふムりまそる(奥)ヘヽエ御婚禮のお仕度でムりまそるか(浪)アコレいやるなといふたのにト恥かしき思入(四)ツィうつかりと申ましたト此内娘あたりへ思入あつて見物に見へるやうな緋鹿の子のきれを懐へいれるこれを與九郎見て恠り佐兵衛左助も呟き合娘四十八ハ捨せりふしらぬふりとして摸樣物を見て居る左助奥へは入る鳶の者を引ばり出て來る(鳶)モシ万引をしたやつハどれでムりまそ(太)アコレ〳〵かにしなせへト呟く四十八思入あつて(四)もやう物ハ此二ッと帶地ハ錦毛織とも以上三本緋がの子に緋ぢりめんにて直段ハ何程なるか勘定をして置てくりやれ八幡さまへ參詣なし歸りに寄つて持つて參る(奥)長りまして ムりまそる(四)サアれせうさまくれぬ内にお參り申ませう(浪)アィそうしませうあいの(四)これハ大きに世話であつたと四十八娘立上り行ふとそるを此時鳶の者佐兵衛左助立ふさがる奥なりませんの作平源五若ィ衆下男出で來り(佐七)モシ一寸れ待下さりませ(四)なんぞ用か(奥)御せうだんを被成ませそるな(四)何せうだんとハ(奥)お隱し被成た緋鹿の子を置てお出被成ませ(四)何おせうさまが万引をしたあて事もない麁相を申跡で後悔致しおるなト四十八きつといふ娘四十八にそがり(娘)コレ四十八コリヤどうしたらよからうわいな(四)ィヤ何もお案事被成事はムりせぬおせうさまを万引などと惡名つけしにつくいやつら明りを立ねば歸られませぬまア落つきてれ出被成ませ(奥)何あかりを立ねば歸られ

ぬ能もそんな事が云れた事だ(四)シテ万引を致せしとい(奥)四の五のいうい面倒だ○ト奥九郎ッカ〳〵と行娘をとらへるアレエトいふむりゑ懐より絣鹿の子を引出し(コレ此きれいぞこから持て來たのだ(娘)アコレそれい(佐)アコレそれいもないものだ(太)見掛によらねへふていやつ(鳶)向後の見せしめ二人り供袋打きにゞてやらう(佐)イヤゞるとい面白い(源)おいら達もやじ馬だ(鳶)かまう事いねへ(皆々)ゞろ〳〵ト太神樂の鳴ものに成り皆々二尺ざし暖簾掛のぱうなどにて四十八娘をぶつ四十八娘をかばい皆々を留るごつちやの立廻りこれにて島田髷くづれる四十八髷がくづれ好のかつらに成る此時娘の顔へ疵の附事アイヤ……とそのまゝうつぶせに成り居る向ふより宗之助羽織着流し息子の拵へにて出て來り直に内へは入る皆〳〵を留(宗之助)これいしたりどうしたものだ見世先で立騒ぎ静にしたがよいわいの(奥)イエ若だんなおかまひ被成なこいつらい万引でムりまそる(四)ヤアア身に覺へなき万引呼はり盗だといふい此きれか(奥)知れた事だ(四)そりやア山形屋でかつたきれふてうがあるからとつくり見やれ(奥)ナヽ見なくってどうそるものだ○ト件のきれに附ているふてうを見て恟りなし(ヤア丸の内に山の字いこりヤ山形屋のふてうの印し(佐)そりヤ万引と思つたのい(太)余所の代呂物であつたのか(四)よもヤ万引といはれまいト皆〳〵ひよんな事をしたと云思入鳶の者かたりだといふこなし作平源五い咀き合下手へは入る(宗)私い此家の倅只今お得意よりの歸りがけ承りまされゞ若イ者が心得違ひでありたさまへ畏相な事を申ましたそうにムりまそが幾重にもお詫を致しまそるどうか御了簡なし下さりまそるやう(皆〳〵)一同お願ひ申まそる(四)何一同お願ひ申まそどの口でそんな事をいはつしやる万引でもないものに能も盗人の悪名附たな(宗)イエもふ其仰せいいち〳〵御尤ろこをどうぞお情に御了簡下さりませう(四)だまれ〳〵〳〵だまりヤアがれ(宗)ヘイ(四)コレ何を隠さうおせうさまい二階堂信濃守のお目附をおつとめ被成る早瀬主水さまの御息女今度秋田の御家中へ御そんを組れし花嫁御万引といふ悪名附ケたゞ誤ッて済ふと思ふか(手代皆〳〵)恐れ入りまして厶りまそ(四)手まへ達でい譯がわからぬ亭主にあはふ亭主を出しやれトきつといふ合方きつぱりと成り(幸)只今それへ參りまそでムりまそるトヨヶいせんの幸兵衛出て來り(四)ムヽスリヤその方が此家の亭主か(幸)ヘイさやうでムりまそいさいの樣子い逐一承りまして厶りまそる何共かとも申上樣なき手代共の不調法お詫の趣意い立ませう程にどうか御了簡被成て下さりませ(四)外ならぬ主じの頼み余の事ならば了簡も致し呉ふが此義計りい(幸)スリヤいかやうにお詫をば申上ても御了簡い(四)ならぬといふいコレ御ていしゆ此疵と見て下さりませトうつぶせに泣居る娘を引起し額の疵を見せる皆〳〵恟り思入(幸)ヤこりやおせうさまの額に疵が(皆々)ヤ……ト思入(四)今も捕者が申如く御縁極りし大事の御身疵が附ていこのまゝに屋敷へお供い致されぬ氣の毒ながらも片ッぱし首を並べて云譯に身共も此場で切腹いたそ(浪)アコレ四十八そのやうに事

あら立ぎと内〳〵にどうか仕様ゝないかいの(鳶)モシ憚りながら一寸是へお顔をかして下さりませト四十八下手へ來て(四)ムヽ顔をかせとゝ何用だ(鳶)外の事でもムりませぬがアノ脊高な番頭が見違をしたばかりわつちらまで共〳〵にとんだ間違ひを拵へやしたが今おめへさんのいふ通り片ッぱしから切た所がきりばへもしねへかほちやとうなぞおせうさんのお詞もあれば道でお轉びなぞつたとかなんとか胡麻かしていひ譯をして下さりませお禮いしつかり致させまそモシいつぺいやる氣みなつておくんなせへト鳶の者宗之助より十兩受取四十八の前へ出ぎ四十八ヒろりと見て(四)十兩計りのはした金後日に旦那に知れた日にやァ命にかゝはる仕事だぞ百兩あらば知らぬ事一朱かけても了簡ならねへ(幸)アヽイヤお待下され最前ゟ見受まそれば此扱ひにて不足の御樣子金で買ざる人の命とふか御心にいる樣に○ト一寸思入あつて百兩包を出しこれにて御了簡下さりませト四十八思入あつて金をとりあげ開きにつたりこなし(四)ムヽ了簡しにくひ所なれどきれ放れよきあるじがわいさつ百兩ならば了簡いたろう(幸)スリヤお聞濟下さるとか(四)いかにも(宗)これで一同(皆〳〵)安堵しました(四)思はぬ事で暫しのひま入り(狼)それも事なく濟上ゝ(四)そこしも早く(幸)さやうなれバ(皆〳〵)お二人りさま(四)世話でムつたト四十八娘立上り行かける此ひせんより上手へ逃當出掛り伺ひ居て此時前へ出て(逸)お待ちよと待ッて下され(四)ムヽ見れば立派なお侍待とゝなんぞ用でもムるか(逸)いかにも(四)シテろの用ゝ(逸)お下にムれ(四)ムヽト思入あつて下に居る読への合方(逸)扨最前よりの一部始終一間で殘らず承つたが二階堂の御藩中でムるか(四)いかにも二階堂信濃守が家來早瀬主水が息女でムる(逸)アノ爰ないつはり者めが(四)なんと(逸)斯いふわれゝ二階堂信濃守が用人役玉鳴逸當と申者(四涙)ェ(逸)早瀬主水と名乘もの我屋敷に覺へない(四)ムヽ(逸)殊にゝ縁組定まりし娘といふもまさしく男(涙)ヤ(逸)女といふても憎からぬ妻なれ共某が男と知つたゝ二の腕にちらりと見たる櫻の彫物なんと男であらうがな(涙)サアろれゝ(逸)かたりめ返事ゝないんと(涙)コウ兄貴もふ化てもいかねへおらァ尻尾を出して仕舞ふ(四)ェヽ此野郎ゝひつゝみしのねへもふちつとがまんそりやァいゝに(幸)扨ゝ女と思つたゝ(宗)かたりであつたか(皆々)ヤァ〳〵(涙)しれた事よ金がほしさにかたりに來たのだ秋田の部屋でそつかりとられ鹽味鳴の錢にも困つた所から一本計りかせがふと損料物の振袖で役者氣どりの女形うまくはまつた狂言もかう見だされちやァ薛ゝねへほんの只今のお笑ひ草だ(逸)工みしかたりが顯れてもびくともせぬ大丈夫ゆそりかたりの其中でも定めて名あるものであらうな(涙)知らザァいつて聞せやう以前をいいゃ江の嶋で年季勤の兒が淵岩本院で搆中のまくらさがしも度重りとう〳〵島を退出されそれから若衆の筒もたせ名さへゆかりの辨天小僧菊之助といふ小若衆さ(四)其合ぎりの尻押ゝ生れが漁師に波の上板子一枚其下ゝ地獄と名によぶくらやみも居所定めぬ南鄕力丸面ヲを覺へて貰ひやせう(逸)扨ゝ此程世上にて五人男

と噂ある日本駄右衛門が餘類よな(菊之助)ェ、その五人男のきれつぱしさまづ第一が日本駄右衛門南郷力丸忠信利平赤星十三辨天小僧わつちやァほんの天窓數さ(力丸)コウしら化にぶちまけたから歸しもしめへが歸りもしねへ○サァかたつた金ゝかへしやそトいぜんの金を幸兵衛の前へはふる(菊)サァ是からゝ二人り共爰から突出してくんなせへかたりがばれた夫時ゝ送られる氣で新らしくさらしを一本切て來たのだ(力)是ゝら先ゝこつちの働きどいつもていつも口一ッで抱ィて行から覺期しろ(逸)思へばにつくきト逸當刀を持立掛る幸兵衛宗之助是を留(幸)アモシ旦那さまアノ〳〵お待下さりませかれらをおきり被成ましたら私方ゝともかくもあなたのお名の出まそ事(宗)嘸やお腹も立ませうが何を申もわるい相手(逸)ろれゆへ身共も扣へおつたが余りにつくきやつら故(幸)デハムりませうが大事の御身私共におめんじ下されませ(逸)達てとあらば兎も角も此方元より事ゝ好まぬ(菊)サァきるあら早く切られねへか(力)それ共切らざァ突出そ共(菊)夜がつまつた(両人)早くしねへか(幸)コレおまへ方もよいかげんにふてがつてをいはつしやいしばつて出その突出そのとゝわしが方でいふせりふそれをいはぬが商人ゆゑ只何事も是切りに無事に歸つて下さりませ(両人)ィヽャいやだ歸られねへ(幸)そりや何ゆへにかへられませぬ(菊)二階堂の藩中で早瀬主水が娘といつたも化が顯れ百兩の金をろつちへかへしたらいゝそと知れた五分と五分ろつちにそんゝあるめへがこつちのそんゝ万引と寄ッて掛ッて大勢にぶたれたおれが向ふ疵此始末ゝどうしなさる(幸)サァろれゝこつちの誤りゆへ詫て済ならこつちから膏藥代を差上まそがそれでどうぞお二人共此場を歸つて下さりませ(菊)ムヽろりやァ物ゝ相談だ趣意が附なら歸りも仕やう(幸)そう了簡をして下さるなら些少なれ共此金をどうぞ取ッて下さりませ(菊)なんだ膏藥代ゝ十兩か辨天小僧と南郷が與服店でかたりぞこない五兩づヽで歸つたといはれた日にやァ恥の恥こりやァおかへし申やせう(力)コレ菊や長く居たなら二十と三十ねだり出しもしやうがなこつば仕事で夜が更らァまァそれをとつてかへりやな(菊)それじやァこれで歸らうゥ(力)モシお侍さん大きに失禮を申ました(菊)此お禮いつか一度(逸)ムヽいひぶんあらば何時でも(両人)きつと仕にやァ置やせぬよト二挺三昧せんの早き合方題目だいこを冠せ兩人よろしく向ふへは入る(逸)ァ惡もの共といいひ乍ら身を投出してのゆそりかたり扨〳〵にくひやつでいある(幸)イヤモあなたさまのお出被成ませぬとかれらに百兩うま〳〵とかたられまそ所(宗)計らぬ難義を退れましたい偏に旦那さまのお影ゆへ(與)數ありませぬ私共迄(佐)御禮ゝ詞に盡されませぬ(太)ェヽ有難ふ(皆〻)ムりまそる(逸)さしてもない事をそのやうに厚ふ禮をいはれていかへつて身共迷惑致そ○イヤ最早初更も過たやうす又〳〵明日參るであらう(宗)デハムりませうがてうど御時分何ゝなく共お湯漬でも(逸)その心配ゝかならず無用(幸)左樣ならば差上まそまいがまだ最前の其外に御覽ゑ入度品もムれば(佐)せひとも一ト〻まづ(太)奥の間へ(逸)左樣迄にいはるゝを

辞退致そもかへつて不遠慮(幸)何ンなく共(宗)御禮にいつこん(逸)然らば御ていしゆ(幸)
且那さま(逸)ドレ御ぞうさに〇ト逸當立上るを道具替りのしらせ(なるでムらうト皆〳〵
辞義をそる此見得題目太皷にて道具廻る
本舞臺演松屋奥座敷土藏前の体呉服つゝら積かさねあり爰に逸當住居酒道具取ちらし白臺
の上に反物を紙に包み水引掛ケ前へ畳幸兵衛宗之助手を附て居る此見得合方にて道具納る
ト逸當思入あつて(逸)かやうな禮を受やうとて身共致せし事でいない身が屋敷の名をかた
りにつくきやつゆへ見るゝ忍びぞ口出！致せし迄の事何ゆへ禮を受やうぞかならず無用に
致してくりやれ(幸)さやうでいムり升うが百兩といふ金子をばかたられませぬいあなたの
お影(宗)お禮の致しやうもムりませうがさし當ッての事ゆへにあり合の呉服もの(幸)せひ
共お納め下されねばどうも心が濟ませぬト逸當めいわく成る思入あつて(逸)ム、心が濟ぬ
とあるならばいかにも禮を受るであらうが迚もの事に某が望みの品を貰ひたい(幸)よふ仰
られて下さりましたお望みの品い何ンなり共(宗)お羽織地かお袴地思召のその品を仰聞ら
れ下さりませ(逸)近比勝手な事なから申てもよからうかな(幸)よろしい段でいムりませぬ
(宗)シテあなたさまのお望みいト逸當いひにくそうに(逸)申兼た事ながら迚も禮に下さる
なら金子でおもらひ申たい(幸)これい心附ぬ事でムりました〇コリヤ〳〵悴〇ト宗之助に
耳き水引かけてのしを添(宗)畏りましたト立掛るを逸當留て(逸)アイヤ御ていしゆ金子な
ら包むに及ばぬ箱の儘あり金のこらず所望したい(幸)何とおつしやるト恂りなを逸當をつ
と立て刀を抜き(逸)サ刀に掛て貰ひ申ぞ(兩人)エヽト舞臺へ刀を突さし呉服つゝらへ片足
掛タ急度見得時の鐘きびしくそゞき合方に成り上下よりいせんの力丸菊之助先に作平源五
佐兵衛左助小僧三人をしばり引立出て來る(力)頭まんまと(四人)首尾能(逸)コレ〇表裏の
ぶりハいゝか(菊)アイ錠をおろして出入を留め内中殘らずしばりました(幸)扨い玉島逸當
どのも(逸)今海内に隱れのねへ日本駄右衛門といおれの事だ(幸宗)エヽト思人合方替って
(逸)駿遠三から美濃尾張江州きつて子供に迄其名を知られた義賊の張本凡日本六十余州迄
みには入らぬ國もなく誰いふとなく日本と片名に呼るゝ頭株二人りを玉にくれ合からまん
まと首尾も宵の内時刻を計つた今夜の仕事あり金のこらず出さつせへ(力)ないといふなら
仕方がねへむごい殺生しにアならねへト幸兵衛へ刀をさし附る宗之助恂りして幸兵衛とか
こむ(宗)アヽ申盗人どのわしを殺して下さりませ大事〳〵の義理あるとゝさまぞふゞ助ケ
て下さりませ(幸)アヽ申どうぞ待て下され悴が義理ある親をかばへばわしも又義理ある悴
殺されぬい同じ事駄右衛門どのい盗賊でも義づよいお人と聞ゆへに悴が命を助ケねばなら
ぬわけを一ト通りお聞被成て下さりませ〇ト謡へけいて笛の入りし合方に成り（何を隱そ
う私い三十越に一子なくどふがあしてと初瀬寺の觀世音へきせいをかけ計らぞ一子と設け
し故是ぞ大士の申子と毎月かゝさぞ夫婦共御縁日にい悴と抱きお禮に通夜を致しましたが

忘れもせぬ十七年跡然も九月の十七日御堂の内に喧嘩があつて右往左往に逃るはづみ妻が亂相で我子をうしない邊りを見れば泣居る幼子夫を我子と思ひ違へさわぎの紛れやう〳〵と見つて見れば知らぬ幼子ふびんに其儘捨も成らぬ我子の替りと育てるうちもいづくの誰が悴なるか證據あければ所〳〵方〳〵尋ねさがせど我子共ついにそれ成り知れぬゆへろのまゝ育し此悴月日ゝ立どあけくれゝどこにとうして居るぞとうしなふ悴を忘れねば定めて是が實親も子を思ふ身ゝ同じ事嘸や案事てれりませうどういふ事であるが日ゝ尋ねて來まいものでもないその時金に命をかへ殺しましたといはれませう金ゝ世界のわきものゝまけふうしなふてもわした又出來まいものでも厶りませぬがとられた命ゝかへりませぬ此まゝ店を仕舞ばとて金ゝ殘らぬ上ケまさう悴が命ゝ此わけゆへ助ケて下され駄右衛門どのとうぞ聞わけて下さりませト駄左衛門にとがり頼む駄右衛門思入有て（駄右衛門）ィヤ其心配にゝ及び申さぬ最早金子も申受ない（幸）エヽ〇とゝ又何ぢへ（駄）子細ゝ只今申さんが十七年跡初瀬寺で取違ひたる幼子の衣類の内にあかづきし三ッ龜甲の紋附・黒地の袖にはぎゝ厶らぬか（幸）いかにも袖のはぎ合ゝ三ッ龜甲の紋附し黒羽二重が厶りましたそれ悴下着の袖をお目にかけよ（宗）ヘッ〇ト片袖をぬぎ黒のはぎを見せ（これぞ實父の定紋に下着ゝはいで此年月肌身放さぢ着ておりまをるト是にて駄右衛門思入あつて羽織をぬぎ着附に三ッ龜甲の紋あるを見せ（駄）幸兵衛どのコレ御覽下されいト幸兵衛宗之助を見て思入（幸）ィ駄左衛門どのヽ小袖の紋所（宗）寸分違ゝぬ三ッ龜甲（幸）もしやこなたゝ宗之助が（駄）面目ないが親で厶る（宗）ェろんあらおまへが（幸）親子であつたか〇ェ……ト宗之助駄左衛門の傍へ行ふとして幸兵衛へ思入あつてじつと成る駄左衛門幸兵衛を上へやり貫中へ住ひ（駄）現在悴が十七年育てられたる内とも知らぢ蛭みには入るのみなるかせつがいなさんとなしたる大罪まつ平御めん下さりませ〇ト手を突き思入あつて（ァ思ひ出せば其折ゝ身貧にせまり妻に送れ養ひ兼て初瀬寺の通夜を幸ひ御堂の内慈悲ある人にひろわれなば行末迄もよからうと捨る程でも親の欲誰がひろふかと子の邊り去り家たるを見とがめられヤレ捨子よといはるゝと暄嘩のていにもてなして跡をくらましその儘にしばらく都に足をとめついに賊黨の中ゑ入りうき月日を送る内も今そこ元のいはるゝ如く十七年がその間察た間も忘れゝ致しませぬ（宗）そんならおまへが實のとゝさまで厶りましたか〇ト寄らふとして幸兵衛へ思入有て扣へ（おなつかしふ厶りまをる（幸）ェァ其元にゝ捨しのみ我子を連てゝ行れぬか（駄）サ捨るほどゆへ存せぬが通夜ゝ近い近在より參詣なせばいづれへか他國へつれゆくものならん悴が受し御恩送りにいづれいづくに厶る共尋ねさがして進せませうがなんぞ子息に是ぞといふ證據のものゝ厶らぬか（幸）別に証據も厶らぬが其折こし　提ケたるきんちやくされゝ赤地のおしどりぎれ中にいれたるろの品ゝ初瀬の御影に臍緒背寛文元年癸の卯四月廿日亥の時の誕生幸兵衛悴幸吉と書記して厶りまをる（駄）寛文元年卯の年ゝ今年でて

うど十七年さそれば悴と同ィ年ト是を菊之助聞思入わつて腹にまきしうこん木綿の間より赤地の錦の巾着を出し(菊)そのれしどりぎれの巾着ハもしや是でハムりませぬかト出して見せる幸兵衛とり上ケて見て(幸)誠にこれぞ覺への巾着(宗)そんならおまへが(菊)その幸吉でムりまも(皆〻)ヤト思入わつて(幸)シテまアろちハ此年迄いづくで人になつたるぞ(力)そのいりわけハ力丸が退れぬ中ゆへ一通りわしが替つてはなしませう(幸)そんならこなたものがれぬ中とか(力)サア其夜御堂で幸吉を拾ッて來たハわしが親仁六右衛門といふ漁師だが觀音さまが信心で毎月かゝさず南郷から十七日にお通夜のお籠り悴といふも只一人りてうど弟のはしひ最中そのまゝ育てゝ居るうちに岩本院から望まれてきりやうがよさに寺小性忘れもせぬアノ時ハおぬしが十二の年で有た(菊)夫から島できうくつな勤がいやさにぐれはじめとうゝあそこにいられなく辨天小僧と肩書にいはるゝ樣に成たのも元ハといやァ乳兄弟一所に育つて力丸がわりい遊びを見習つてこんな體になつたと云せうやつぱりわしが生れつきわりい性根があつた他人を恨む所もねへ此身から出た錆刀始終ハお上みの手に懸り親にうき目を見せるのも是も定まる業だとあきらめどうぞゆるして下さりませ(幸)何をゆるそのゆるさぬのと盗人そるも商人そるも持て生れた其身の一生(駄)思ひ廻せば十七年大恩うけし此内へ(菊)神ならぬ身の露知らぬ(力)わぶねへ白及の夜働き(宗)露の命をとらるゝ所(幸)身のいひわけから此やうに(駄)別れ程經し親と子が(菊)名乘あふたるけふも又(力)月ハ替れど十七日(宗)枯たる木にも花の咲(幸)是も薩堪の道びきなるか(駄)ふしぎな出合で(皆〻)あつたよなアト皆〻よろしく思入わつて(幸)思ひがけなく此樣に名乘て見れば親子兄弟つながる縁にこなた衆へ此千両を進せる程に今からさつぱり盗みを止め誠の人になつて下され(駄)お志しハ忝ひが此身をはじめ二人共やめやうといつて止られぬハ凡手下も千人余りこれらが爲に本心に立かへつても舊惡にいつかハ掛る天の網首級を野末にさらそ迄ハやめる事のならざる身の上(菊)五人のものが召捕れ仕置に成ると聞たならその時こそハ親子のよしみ未練な事をいふやうだが跡の回向を頼みまも(幸)そんなら命のある内ハ(力)生涯盗みの夜働き疊の上でハ死れませぬ(幸)アゝ情ない)幸宗)事じやなアト幸兵衛宗之助泣く駄右衛門思入わつて(駄)コリャ悴我ハ誠の親ながら東西知らぬその内に捨る程のひどく心親と思ふな親でハないぞ十七年がその間手しほにかけて育てられし幸兵衛どのが親なるぞ現在實子ハありながらふ世話の出來ぬ身の上ゆへ幸吉どのになり替りよふ孝行をつくしませうぞ(宗)ハッ仰せ迄もムりませぬ產の親より増りし御恩孝行せいでなんとしませう(駄)ムゝうの心を忘るゝな(宗)死でも忘れハ致しませぬ(駄)出かした悴それでこそ賊の胤ともいはれまい(幸)コレ悴聞たかそちも又手下となれば子も同前駄右右門どのを親と思ひかならず孝行忘るゝな(菊)そりやァわつちもその心實子に替つてけふからハ命に掛て

孝行仕まと(幸)そんならそちも深實に(菊)孝行しにやア義理が濟ねへト是を聞力丸思入あつて(力)ア、孝行としてへ時分に親いなしと二人りと違つておれなざア死だ親仁やお袋に不孝に不孝をつくしたが今のと聞て面目ねへトあたまをかく(駄)世に盗人い非義非道鬼畜のよふにいふけれど(幸)かうして見れば素人よりはるかに增つた仁義の道○定めて以前いよしある生れ(幸)いのにもむかしい遠州にて鎗をも突せし鄕士の果(駄)又貴殿の身の上い(幸)何を隱そう其以前い小藤乍も小山の家中仔細有て浪人なし大小捨て町家の交り只今にていい此如く何ふ足なくくらせども町人にて果る事本意あらねば此程より何卒歸參を願はんとつてを求て頼みし所一ッの功を立よとある仔細といふい先達て紛失なせし胡蝶の香合詮義仕出して差上ゲなば夫を功に御しやめんと聞より諸方を詮義致せど今に何の手掛りなく實の行衛知れざれば所詮此身の願ひも叶はぢ一生掛る商人にてくち果る我無念駄右衛門との御すいりやう下されト是を聞三人思入あつて(菊)そんならいせんい小山の家中で其實ゆへ夫程くらうを○ト思入あつて「知らぬ事とて(幸)エ(菊)とんだ事をしたなアト思入ばた〳〵ゑ成り與よりいせんの△出て來り(△)モシ頭更にやならねへ仕度をしなせへ(駄)何更にやアならねいとい(△)爰の内から訴人をして捕手の衆が今に來やすよ(幸)何此家の内から訴人せしとい(△)たしか番頭の與九郎とやら(宗)扨いかれめが○ト△を見て「ヤおまへい見せへお出のお客さんろんならやつぱり(駄)おれが手下だ(宗)はんにお前が譏へし五枚の小袖が出來ましたトつゝらの内より紙包の小袖を出ぜ駄右衛門見て(駄)これぞ五人が物ぜきのまさかの時のはれ小袖(力)折よく出來しい是幸ひ(菊)赤星忠信諸共に(駄)五人そろつて花〳〵しく(力)ひらがる捕手を切ちらし(菊)一トまづ爰を落のびん(幸)さやうなれば駄左衛門どの(駄)幸兵衛どの(宗)隨分まめで(菊)かならぜ達者でト幸兵衛い菊之助駄右衛門い宗之助と顔見合(駄)ア子い三界の○ト首を叩く幸兵衛い寄ふとそる宗之助をへだてる是を木のかしら「ア、つるかめ〳〵ト駄右衛門首の廻を拂ふ寺鐘迷子の鉦太鼓にて

ひやうし幕

本舞臺都て鎌倉稻瀨川堤の体波の音にて幕明く

ト雨車波の音本釣鐘を打込む正面より船から上りし心にて菊之助利平十三郎力丸駄右衛門一本ざし下駄がけしら波と書し番傘をさし出て來り土手の上へ居ならび思入あつて(菊)雪の下から山越しにまづ爰迄い逃のびたが(利平)行先つまる春の夜の鐘も七ッか六浦川(十三郎)夜明ぬ内に飛石の測崎を放れ舟に乘り(力)古鄕を跡に三浦から岬の沖を乘り廻さば(駄)陸と違つて波の上人目にかゝる氣遣ひなし(菊)しかし六浦の川端迄のつきる繩手が遠州灘(利)ゆだんのならぬ山風に追手のおつての早手に逢ば(十)盜賊にあらぬ一トこしのそのかぢ柄の折る迄(力)腕めへ見せて切ちらしかないぬ時い命綱(駄)碇をきつて五人共帆綱の繩に(五人)掛ろうかいト又右の唄に成り土手より平舞臺へおりる三がいの捕手四人ばら

〳〵と取巻同じく三階の捕手出て五人取巻(ロ)空賊の頭本日本駄右衛門それに聞ふ間人の
ものやる事ならぬ(皆々)うごくなトこれにて皆〳〵思入あつて(駄)扨ハ五人が此所へ来も
を待よせ(五人)なしたるか(駄)ヤ、斯罪顔の上ハひきやうみれんに逃ハせぬ一人〳〵に名
を名乗り縄に掛つて(五人)刑罪受んト是にて舞臺へ五人居並ぶ上下に捕手とり巻(ロ)流石
ハ頭空けなげな一言シテまつさきに(皆々)進みしハト誘への嗚物に成り(駄)問ハれて名の
るもおこがましひが盗れハ遠州濱松在十四の年から親に放れ身のなりわいも白浜の沖を越
たる夜働空みハそるが非道をせぬ人に情を掛川から金谷をかけて宿〳〵で義賊と噂高札に
まわるはいふの豊越しわぶないその身のきやうがいももはや四十に〳〵間い[illegible]
年六十余州にかくれねへ賊魁の首領日本駄右衛門(菊)扨其次ハ江の島の岩本院の見上りふ
だん着なれし振袖から髷も島田に由井ヶ濱打こむ波にしつぽりと女に化て箇もたせゆだん
のならぬ小むすめも小袋坂に身の破れわるい浮名も龍の口土の牢へも二度三度だん〳〵越
る鳥居數八幡さまの氏子にて鎌倉無宿と肩書も鳴に育ッて其名さへ辨天小僧菊之助(利)つ
いて跡に扣へしハ月の武蔵の江戸育がきの折から手くせがわるく抜参りからぐれ出して
旅をかせぎに西國をまわつてしゆびも吉野山まぶな仕事も大峰に足をとめたるならの京墓
打といつで寺〳〵や豪家へ入込み空ッたる金が御たけのつみとがハ聞抜の塔の二重三重か
さなる悪事に高飛なし跡をかくせし判官の名前かたりの忠信利平(十)又其次に連なるハ以

拔家る空み心の深みをり柳の都谷七郷花水橋の切どりから今牛若と名も高く忍ぶ妻も人の
目に月影が谷御こしか嶽けふぞ命のわけ方にきゆる間近き星月夜その名も赤星十三郎(力)
扨どんじりに扣へしハ汐風荒き小ゆるぎの磯馴の松の曲りなり人になつたる演育仁義の道
も白川の夜舟へのり込む所空人波にきらめく稲妻の白刃におどせ人ごろし脊負て立れぬつ
みとがハその身におもき虎が石悪事千里といふからハどうで仕舞ハ木の空と覺跡ハ愛て鳴
皆々)何をこしやくなト波の音佃かそめてどん〳〵にて捕手皆々打てかゝる上下へ別れ傘
にてあしらひトド一腰をぬき上下へ進込みホット思入(駄)けふハ一所に身の終りと覺期ハ
せしが一日でものがれられなハ逃のびん(力)いかさま命がものだねなれば(利)五人づれに
て一トまづ此地を(駄)ヤ大勢づれでハ人目にたつ忠信赤星両人ハ是より直に中仙道南郷
辨天ハ道を達へて東海道片時もはやく落のびよ(四人)シテ又頭ハ(駄)此身ハやつぱり鎌倉
の内に隠れて跡より出立(四人)ろんなら頭(駄)片時もはやく(四人)合点だト波の音佃に成
り力丸菊之助ハ花道十三郎利平ハ東のあゆみ駄右衛門一人をふまへ一人をねぢあげ跡を見
送る左右向ふへは入るといつぱいにキヅみよろしく

明治廿一年十月三十日印刷
明治廿一年十一月一日出版
版權與行權　所有

著作者　吉村新七
本所區南二葉町三十一番地
吉村いと
同區同町同番地
發行者　桑原德勝
京橋區加賀町十二番地
印刷者
賣捌所　歌舞伎新報社
同區浅草四丁目十六番地
定價十錢

088597-000-4

特52-573

児雷也豪傑譚語・夢結蝶鳥追・青砥稿花紅彩画　上巻

河竹　黙阿弥（吉村　新七）／著

M21

DBJ-0256